

『美し国』会報誌 平成二十五年秋号に、特別対談「日本を癒す」をテーマに由井会長のインタビュー記事（聞き手「美し国」副代表の池田整治さん）が掲載されました

特別対談 日本を癒す

カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー学長

日本豊受自然農株式会社代表取締役・農民

由井寅子

×

美し国副代表

池田整治

「種を持って、畝を作れ、作物を植えよ」。日本人に必要なのは、自給自足と苦境に負けない心と身体を養うこと。そう語るのは、日本を代表するホメオパスであり、自身を農民と名乗る由井寅子さん。かつて身を置いた報道の世界、長きにわたる海外生活を通して、由井さんの目に映し出された日本の素晴らしさ、そして危うさについて、美し国副代表・池田整治がお話を伺います。

「ホメオパシーとは」

池田

三年前、ホメオパシーと由井寅子さんのことを知った時には本当に感動しました。そもそもホメオパシーと関わるようになった切っ掛けは何でしたか。イギリスに行かれた理由は別にあったそうですが。

由井

もともとはイギリスで報道の仕事をしていました。その頃に潰瘍性大腸炎という難病になり、何をやっても治らず二年間苦しんだのですが、ホメオパシーと出会ってわずか一ヶ月で治ってしまいました。それがきっかけで、ぜひとも勉強したいと思うようになり、テレビの仕事をやめ、イギリスのホメオパシーカレッジで五年間学び、ホメオパスという職業についたのです。日本での講演をきっかけに日本人がたくさん来るようになりました。

池田

わざわざホメオパシーのためにイギリスへ？

由井

そうです。十九年ほど前ですが、高い渡航費を払ってでもホメオパシー治療を受けたかったのでしょう。それなら、私が日本へ行くべきではないかと思ったのです。日本にはもともと、自己治癒力を触発して自ら健康になる、という療法があったのですが……。

池田

そうですね。いまは殆どが西洋のアロパシー、対症療法ですが、それとは別な根源治療もありました。ホメオパシーもそうした療法のひとつと言えるのでしょうか。

由井

ホメオパシーはドイツ発祥の自然療法で、日本語では「同種療法」と訳されます。薬草などの成分を抽出してアルコールで薄めて振って叩く「希釈震盪（きしゃくしんとう）」の工程を繰り返し、それを砂糖玉にしみ込ませた「レメディー」を用います。原料に潜在するエッセンスが保存されたレメディーをとることで、自然治癒力が触発されるという考え方です。

池田

振って叩く、という工程が興味深いです。

由井

ホメオパシーでは震盪、つまり「振る」という工程が重要なのですが、奈良の石上（いそのかみ）神宮には「鎮魂祭（みたまふり）」という神事がありまして、ひい、ふう、みい、よ…と、シャンシャンと音をたてて振るとそこに命が宿り増える、というものだったので。それを知って本当に驚きました。

池田

まさにホメオパシーそのものです。

由井

日本最古と言われている石上神宮にそういう神事や祝詞（のりと）があることを知って小躍りしました。日本にも振って魂（命）を増大させる方法があるのだと。人がふと気が遠くなった時など、大丈夫？と行ってゆすったりしますね。子供をあやす時も、とんとんと叩いてあげるとすごく落ち着きますね。命が戻る感じがあります。日本にも古来、そうした療法があったのだと思います。

池田

驚くべき共通点ですね。ところで、日本に戻られてからはさらに病の根源的なものを追求

するようになられたようですが、その理由は？

由井

効かなかったからです。イギリスにいる時から、ドイツ人やフランス人、イギリス人に比べて、日本人の効きが悪かったことが不思議でした。もしかすると医原病という薬からくる病気によって、レメディーが届かないのかもしれない……。そう考え、薬を希釈震盪してつくったレメディーを与えたところ手応えがあり、日本人の薬害がいかにもひどいのかわかりました。そこで医原病治療を完成させるべく、原典を徹底的に研究し、完成したのがZEN（禅）メソッドです。今、このZENメソッドを引っさげ、海外にホメオパシーの逆輸出をしているところです。

池田

薬害の他に農薬の問題もありますね。

由井

そうです。医原病の次に、今度は食原病で効かない人がいることがわかった。たとえば、アトピーの子に農薬のレメディーを与え、無農薬の野菜を食べさせるようにしたら、アトピーがキレイになっていった。とはいえ、無農薬の野菜などなかなか手に入らない、というのが現状でした。それなら、私が作って皆さんにお分けすればいいと考え、農業を始めたのが八年ほど前です。

池田

それが豊受自然農ですか？

由井

その前身となるホメオパシー農業科学です。群馬で始めて洞爺に移り、それから静岡の函南（かんなみ）に農園を作りました。現在の豊受自然農では洞爺と函南で五十反ほどやっています。

池田

それだけの規模があればかなりの収量になりますね。

由井

はい。最初は農家の方に栽培をお願いしてみました。私たちが買い取るので無農薬で野菜を作ってくれないか、と。どんなに小さな大根でも構いません、買い取ります、と。それでも「出来ない、そりゃ無理だ」といわれました。

池田

農家の方は農薬と化学肥料を使わないとダメだと、マインドコントロールされているのです。

由井

とにかく「出来ない」の一点張りです。私としては、出来るのか出来ないのか、自分自身で確かめてみたかった。そう思って自分でやってみたら出来たんですよ。ただし、収穫量は多くないし、草も取らなければなりません。このままでは日本農業の精神はダメになってしまう、もう一度農業そのものを復興してみようと思い、今日にいたっています。今は、種あって、土あって、雨あって、お天道様がいてくださることが本当にありがたくて…。

池田

自然と一体となった農業、それが日本の本来の農業です。無農薬ですから、土の中に微生物がたくさん生きているでしょう。

由井

土壌に生きている微生物が野菜達を育てているのです。そして、放射能でも、元素変換して無毒化しているのです。農薬、除草剤、化学肥料をまいて微生物を殺すのではなく、微生物と助け合いながら共存するのが良いのだと思います。

池田

嫌気性と好気性の微生物が手を繋ぐことで放射能を原子転換してくれることがわかっています。

由井

人間社会も、いろいろな個性が手を繋いでこそ全体が調和し、不可能を可能にするのだと思います。

池田

微生物の世界も人間社会も、「和をもって貴しとなす」ということでしょう。「子供達を守りたい」

由井

私の実家は愛媛で百姓をやっていました。子供のころケガをすると、母が摘んできた薬草を揉んで傷口に擦り込んでくれたものです。それがよく効いたのですよ。無医村だったの

で、母はそうしたことを良く知っていましたね。

池田

日本の伝統療法もホメオパシーと繋がっているということです。

由井

私は病を通じてホメオパシーと出会いましたが、それが子供時代の経験にまで繋がっていた。ああ、私はこうしたことをしたかったんだと気付かされました。自己治癒力を触発して、自ら健康になるものを探していたのです。そうになると必然的に、医療関係者や製薬会社、メディアなどからは嫌われましたが。

池田

由井さんがホメオパシーを学ばれたイギリスは世界金融支配体制のど真ん中にある国です。その彼らにとって、いま一番の市場が日本なのです。日本の製薬市場は十兆円あるそうです。なおかつ、一番儲かるのがワクチンなのです。普通の薬の場合、薬害があると製薬会社が責任をとらなければならない。ところがワクチンの場合、接種させた市町村が責任をとることになっています。子宮頸がん予防ワクチンなどは三百億円の市場があって、お金は全て海を越えて向こうに行ってしまうますが、万が一のことがあれば、日本の政府が保証することになります。

由井

つまり、国民の税金を使って、ということですね。

池田

そういうことです。由井さんの場合は、その十兆円市場を減らす働きをしてしまったわけです。

由井

知らずにですね。ホメオパスになって見えてくる現実があります。たとえば、多動症や自閉症の原因が薬害と考えられる場合、その薬を希釈浸透したレメディーを与えて治す、という方法があります。前々から私は発達障害の原因が予防接種にあるのではないかと疑っていました。日本で行われている九種類の予防接種、現在では十二種類ですが、そのワクチンを希釈震盪したレメディーを子供達に与えてみたのです。

池田

プールの中に一滴、という程度の薄さだそうですね。

由井

銀河系に一滴の薄さです。分子ひとつもない。成分そのものは含まれず、成分の電磁情報のみが残されているのです。たとえば、薬のレメディーで薬を解毒できるのは、薬の電磁情報を生体がキャッチし、あたかも薬が大量に存在していると認識し、薬を排出しようとして自己治癒力が奮い立つからです。その結果、子供が熱を出したり、鼻血を出したり、耳だれを出したりする。そうした好転反応が出て、自閉症だった子が「お母さん」と声を出した。そして、いろいろな物を食べたいと言うようになり、愛情を示すようになり、泣けるようにもなった。どんどん言葉が増え、単語じゃなくてセンテンスが出てくるようになりました。この療法を行った自閉症の子供達のうち、91%が改善していきました。

池田

91%？現代医学では考えられない。

由井

私自身がたまげてしまいました。その研究結果を日本で発表しましたが、理解してもらえず、まずは海外で発表しました。それから日本でも少しずつ受け入れられるようになりました。約十五年の時間をかけた研究結果ですから、多くの人に知っていただきたい。全部で169名の発達障害の子供に対して調査を行い、レメディーを与えて改善した人の中から25名のデータを持って厚生労働省にも行きましたが、さらに風当たりが強くなりました（笑）

池田

厚生労働省というのは昔で言うお代官様みたいなものですから。

「日本人が持つ『情』」

池田

おもしろい話があります。カンボジアに六百人の自衛隊を派遣した時、選挙監視員として若い女性達もボランティアとして現地入りしたため、襲われないかと危惧されたのです。ところが、ゲリラの首領達からは「日本人には絶対手を出すな」というおふれが出ていたそうです。それはなぜかというと、大東亜戦争の時、現地に残留した日本兵が二万五千人ほどいたそうです。彼らは残ってゲリラのリーダーとなり白人と戦い独立を勝ち取りました。そうした歴史が残っているから、日本人に対する感謝の気持が今もあるんです。インドネシアあたりでは連隊長以下二千人が残って参戦しました。

由井

それは素晴らしい。日本の武士道精神の力でもあるのでしょう。

池田

それが大和心、つまり武士道なのです。たとえば欧米人にとっては災害派遣もスポーツと一緒に。賞を取りにきているのです。日本人の場合は相手が誰であろうと、命をかけて助けに行く。そうした精神だからこそ、戦争で負けても現地に残り、その国の独立のために戦う行為に繋がったのです。それが、自然との一体感のなかで培われてきた大和心なのです。

由井

やはり「情」なのでしょうね。相手の辛い気持ちに一体となって感じ、思い遣る心。この「情」があるからこそ、情緒、情操という日本ならではの感性に繋がるのだと思います。たとえば「田んぼに雨が走ってる」と私が言うと、雨が降って田んぼの稲がさわさわと揺れる様子を皆が思い浮かべる。こうした情緒を理解するのも日本人であって、外国人にはあまりない感性です。

池田

これは日本の大和ことばのおかげでもあります。日本語の周波数は **125Hz** からですから、自然の音が脳に情報として入ってくるのです。英語などは **1500Hz** 以上ですから、自然の音が聞こえないのです。聞き取れないから、自然も征服する対象として捉えるのです。自然と一体となり、地球と一体となり、宇宙と一体となる。それが人間の本来の生き方です。十六世紀以前はそうした考えでしたが、現代の日本は逆の方向に向かっています。それに対して敢然と立ち向かっているのが由井寅子さんであり、ホメオパシーなのだと思います。

由井

大きなことで恐縮ですが…。私はもともと、芋畑と麦畑とみかん山で育ったので、周りには自然しかなかったのです。ですから、イギリスに居た時なるべく自然のある場所を選んで住んでいました。そうはいっても報道の世界ですから、戦争のさなかに行ったりするのでストレスがありましたね。すぐそばで人が死んでいくのに、助けるより何より、まずはカメラをまわす。自分は何をしているのだろう？空しくなってしまう。そうして心が萎えていき、病気にもなっていました。

池田

そして、それが切っ掛けでホメオパシーに出会ったわけですね。

由井

そうです。けっきょく、イギリスには十七年ほどいましたが、心が喜ぶ仕事をしたい、そ

う思って日本へ帰ってきました。日本に帰ってまず、子供を連れて一ヶ月かけて車で九州から北海道までまわりました。自分の中の日本を取り戻したかったんです。この国がどれだけ素晴らしいか、その一ヶ月でどーんと肝に入りました。男尊女卑で学歴社会、そんな日本がいやで飛び出したのですが、外から日本を見ると日本や日本人のスゴさが見えてきたんです。その日本が、製薬、医療、農業・畜産、原発、金融、そして教育、すべてに食べ物にされていることも、私は報道の世界にいたので見えてしまった。これは何とかしなければいけないと思い、その一端としてあらゆるものを自然に戻すホメオパシーを日本に伝えようと思いました。活動も今年で十九年になり、私も六十歳になりました。

池田

六十歳になって新たに再出発という段階ですね。

「インナーチャイルドを癒す」

由井 私がいま力を入れているのは、子供時代に受けた心の傷、インナーチャイルドを癒すインナーチャイルドセラピストの育成です。私自身、おなかにいる時に父親が亡くなり、母親が、おなかの私を叩いたり、冷たい海で泳いだりして、墮胎しようとしたそうです。母親からその事をきいて、ずいぶんと傷つきました。自分はこの世に存在していてもいい、自己を肯定できるまでにはずいぶんと時間がかかりましたが、自分を愛せるようになったら不思議と人からも好かれるようになった。自分を愛せない者は人からも愛されない。これは自分自身の体験としてはっきりと確信したことです。つまり、自分を嫌っている人間は、人からもいじめられるということなんです。

池田

自分を好きになれない。それは日本国民全体にも言えることでしょうね。

由井

その通りです。日本人は戦後の罪悪感政策によって罪悪感と自己卑下にまみれています。正しい歴史を知り、自国の誇りを取り戻すことがとても大事です。日の丸の国旗も飾れない、君が代の国歌も歌えない、自国も愛せない者が自分を愛せるようにはなりません。

池田

私は十五歳で自衛隊に入りましたが、土曜、日曜がくる度に「自衛隊反対！」と書かれた旗に取り囲まれ、とても悲しい思いをしました。

由井

まったくひどい話です。軍事力が低下しているのに国防費がGDPの1%って、そんな国はあまりありません。他国に攻められやすい状況を作って誰が得するのでしょうか？私はなにも戦争に賛成と言っているわけではありません。降ってきた火の粉を振り払うために戦わなければならない時もある、ということです。憎しみや怒り、そして戦いもあり、それを知った上で、愛を持って生きていくことが大切なのです。私たちが強く生き抜いていくためには、どのような苦境に立たされても希望を失わない心をつくる必要があります。それには自給自足の力を養うこと。種を持って、畝を作れ、作物を植えよ、ということです。電気がない不便な環境でも生きていく体力とおそれのない心を作る、そういうことを教えています。

池田

これからTPPが入ってくると、自然の種は無くなっていきますから、それをいかに残していくかがキーポイントになると思います。

由井

そうですね。遺伝子組み換えの種が入ってくることも問題です。

池田

三十年ぐらい前から遺伝子組み換えの種は日本に入ってきているんです。アメリカからくる大豆やトウモロコシの90%以上が遺伝子組み換えのものです。

由井

そういう意味でも、これからは自然農と自家採種の種が大事になると思っています。

池田

遺伝子ですから微生物と違ってウィルスと一緒になんです。ウィルスも遺伝子記号ですので、自分では複製できないため、他の細胞に入って自分を複製する。遺伝子組み換えも同じ作用なんです。放射能、薬、最終的には遺伝子組み換えの食品で日本はダメになるおそれがあります。政府は頼りになりませんから、結局は個人個人が気をつけて危険なものを排除するしかないのです。

由井

そうですね。薬、ワクチン、原発、農薬、遺伝子組み換え種、これらは結局、私たち自身の不自然さを映している鏡なのです。鏡に映った不自然な自分を見ることで、初めて、自分を変えようとする力、自然治癒力も生まれます。悪の中に自分自身を見て、自分を変え

ていく力とするのがホメオパシーの奥義です。そして行動すること。私たち一人一人がなにを選択するかで世の中は変わっていくのです。予防接種も強制ではないので、やらなければいいのです。子供の体をこわしてまで予防接種を受ける必要などありませんから。

池田

私の講演を聴いた方の中にも、子供にワクチンを打ってしまったというお母さんがいるんです。そういう方達にもぜひ、ホメオパシーを紹介したいと思っています。

由井

ありがとうございます。こうした子供達が将来、子供を産み育てていくわけですから。子宮頸がんワクチンを打たれ、産めない状態になることに対して、神様も嘆いていると思います。子宮頸がんワクチンの被害者のお母さん達が立ち上がりましたね。そうした団体にも連絡をして、子宮頸がんワクチンを希釈浸透したレメディーをとってもらえないか、話をしているところです。このように、日本の子供達をどうしたら救っていけるか、考えているところです。ホメオパシーにはその解決法があるのでぜひ利用していただきたい。

池田

ホメオパシーには解決法があるということが素晴らしいです。たとえば先ほどのお話ですが、インナーチャイルドを癒す手段としてもレメディーがあるということですね。

由井

はい、ホメオパシーのレメディーの他にフラワーエッセンスというのもあります。花をみてにっこり笑わない人はいませんね。人間関係のなかで閉じてしまった心を開くため、花のエッセンスを希釈震盪させたものです。そして、宝石のエッセンスを希釈震盪したレメディー（ジェムレメディー）も、こころを開かせるひとつの手段となります。ただしそれはあくまで手段のひとつであって、まずは自分自身に優しくしてあげること、問い掛けてあげること、これが最も大事なことです。

池田

自分を深く見つめ直す、という意味では、瞑想にも繋がりますね。私は山歩きが好きなのですが、山で一人歩きしていると、花や木、山々が語りかけてきます。瞑想に近い状態になるのです。

由井

自然と一体になると、花や木、もちろん人にも頭を下げられる。いわゆる信仰心ですね。信仰心というのは自分を生かそうとしている大いなる存在を信じること。そうすると生か

されていることに感謝できるようになります。

池田

自然との一体感。信仰心。それを持つことが大事ですね。

由井

それが、森羅万象に「情」を持てる、日本人の素晴らしいところだと思います。

池田

人と自然。すべてのものに繋がりを覚えることができる。まさに美し国の活動がそれです。すべてのものと絆をもち、繋がりをもち、それが人であり、自然であり、宇宙であり、歴史なんです。

由井

根本にあるのは、愛です。それがないと何事もうまくいきません。愛ある人間になるには、自己否定、罪悪感をもったままではいけない。日本人のインナーチャイルドを癒し、日本人が本来の命を生きられるようになることが私の願いです。

池田

日本の未来のためにもぜひ実現してください。本日はありがとうございました。

由井

こちらこそ、興味深いお話をありがとうございました。

由井寅子（ゆいとらこ）

一九五三年生まれ。プラクティカルホメオパシー大学大学院卒業。ホメオパシー博士。日本ホメオパシー医学協会会長。カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー学長。ホメオパシーの実践とハーネマン研究で海外から高い評価を得る。とりわけ、発達障害や難病の改善率で世界的に注目され、21世紀のホメオパシーをけん引する指導的ホメオパスとして期待されている。著書、論文、訳書多数。主な著書に『インナーチャイルドが叫んでる！』、『ホメオパシー的信仰』、『ハーブ・マザーチンクチャー』（以上ホメオパシー出版）などがある。

情報提供：一般社団法人 美し国 （菅家一比古代表）

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂6丁目42 神楽坂喜多川ビル5階

問合わせ先 電話：03-5227-1778